

〈論文〉

## 選択体系機能理論に基づく中日翻訳分析 —原文・学習者訳・熟達者訳の比較を通して—

単 艾婷

### 要旨

本研究は、選択体系機能理論を基盤とし、(1) 学習者が如何なる箇所でも困難さを感じるか、(2) その原因は何か、(3) 各文の翻訳の難易度はどの程度かという3つの問いに答えることを目的として、中日翻訳における実践的な問題点に関する詳細な分析を行ったものである。具体的には、まず筆者自身が学習者という立場で翻訳講座を受講し、続いて講座の課題としての中国語短編小説の原文とそれに対する学習者訳文および熟達者訳文の三者を対照し、「観念構成的機能」「対人的機能」「テキスト形成的機能」という3つのメタ機能とそれらの言語的具現形式を視点とした比較分析を実施した。その結果として、直訳調の学習者訳文とは対照的に、熟達者訳文では一定の規則性を持つ言語間の変換操作を行うことによって、翻訳の等価性が確保されていることが確認された。本稿において分析対象とした51件の例文に限定した場合、翻訳の過程でこれらの変換操作が必要となる根本的原因は、全12項目の中国語-日本語間の差異に起因するものであると推測された。また、翻訳の難易度に関しては、観念構成的機能に関するものが比較的易しく、対人的機能に関するものがより難しいという傾向を持つことが明らかとなった。最終的に本研究によって得られた知見を整理し、学習者のタイプごとに、中日翻訳を行う際の留意点に関する提言を行った。

**キーワード**：選択体系機能理論、メタ機能、具現形式、中日翻訳、学習者訳、熟達者訳

### 1. はじめに

外国語を用いて外国で出版されたテキストを読むことは、その地域の言語文化に能動的に触れ、主体的に理解するための最良の手段の一つであると考えられる。このような考えに基づき、筆者は2020年度より、中国国内で出版されたオーセンティック・テキストを教材として導入した中国語授業に取り組んできた(単、2021a; 単、2021b)。テキストには物語テキスト・随筆テキスト・論説テキスト・説明テキストなどの多様なジャンルが存在するが、同実践では最初の事例として、中国語教育界ではまだ体系的に活用されていない物語テキストを使用し、授業を行っている(単、2024)。さらに2022年には同実践の教授内容を整理し、中上級向け教科書『中国 ことばの世界を旅する 一陈謙 <冰箱里的企鹅>』を出版した。本教科書の学習項目の一つとして、上記小説の一部分の翻訳活動を設定しており、筆者も教師という立場で学習者たちと一緒に翻訳に取り組む中で、その面白さと難しさを実感した。学習者が提案する翻訳案に対して、単純にある中国語語彙を日本語語彙に「置き換える」操作の正誤を指摘することは可能であるが、テキスト全体の雰囲気やニュ

アンス、含意などを汲み取った上で、どのような訳文がより適切であるかを端的かつ体系立てて指摘することは、未だ実現できていない。翻訳理論研究の分野において、翻訳とは、起点言語－目標言語間の「翻訳等価性」を保持すること、すなわち（１）原文に忠実で、（２）わかりやすく、（３）立派であり、読者が「一体どちらが原作で、どちらが翻訳かわからないくらいだ」と感銘を受けるような翻訳テキストを作成すること（Nida et al., 1969）であると定義されている。では、この Nida et al. (1969) などによる概念的な翻訳モデルを、より具体的な言語モデルに即して再整理してみると、如何なる対応付けが可能となるだろうか。

具体的な言語モデルを考える上での効果的な分析手法の一つに、1970年代に M.A.K. Halliday によって確立された選択体系機能言語学(Systematic Functional Linguistics, SFL; e.g. Halliday & Hasan, 1989) がある。SFL は、「コンテキスト (Context)」や「選択体系 (System)」などの概念を導入することにより、言語システムそのもののみならず、社会の中で作用する言語の各種機能の側面から言語システムを考察するための方法論である (e.g. 小林, 2017)。SFL 理論におけるコンテキストとは、言語が使用される社会的状況を指し、選択体系とは、言語使用者が、自身の保有する言語リソースから特定のリソースを選択して使用する行為を実現するためのシステムを指す。さらに SFL 理論では、言語使用者・コンテキスト・選択体系の相互作用の中で、言語が以下 3 種の機能を同時に果たすと捉えており、これらは「メタ機能 (Meta Functions)」と呼ばれる。

- ① 観念構成的機能 (Ideational Function): 言語が経験や知識を表現する手段としての役割を果たすための機能。具体的には、言語使用者が世界をどのように認識し、その認識をどのように表現するかに関連する機能。
- ② 対人的機能 (Interpersonal Function): 言語が人間関係を構築する手段としての役割を果たすための機能。具体的には、言語使用者が他者とどのようにコミュニケーションを行い、自己をどのように位置付けるかに関連する機能。
- ③ テキスト形成的機能 (Textual Function): 言語がテキストを構築する手段としての役割を果たすための機能。具体的には、言語使用者が情報をどのように整理し、それをどのように伝達するかに関連する機能。

なお SFL 理論における「テキスト (Text)」とは、「あるジャンルに沿い、特定のコンテキストを経て、言語使用域 (レジスター) から産出された言語表現のまとまり」(シュレツペグレル, 2017: 259) として定義される。

ここで SFL 理論におけるメタ機能の概念を援用し、テキストと翻訳行為の関係について、改めて模式的かつ簡単に整理してみたい。まず、任意の言語  $lx$  によって記述されるテキスト  $T(lx)$  を、3 種のメタ機能、すなわち観念構成的機能  $f_{ide.}(lx)$  ・対人的機能  $f_{int.}(lx)$  ・テキスト形成的機能  $f_{tex.}(lx)$ 、並びに一貫性 (Coherence) かつ統一性 (Unity) を備えた内容  $C$  という 4 要素から構成される集合：

$$T(lx) = \{f_{ide.}(lx), f_{int.}(lx), f_{tex.}(lx), C\}$$

であると捉えたとき、翻訳行為、すなわち起点テキスト  $l1$  から目標テキスト  $l2$  への変換操作：

$$T(l1) \xrightarrow{\text{translation}} T(l2)$$

は以下のように、内容の等価性を起点テキスト－目標テキスト間で保持しつつ、起点言語に備わるメタ機能の様相を目標言語に最適化した形で再構成する操作であると考えることができる。

$$T(l1) = \{f_{ide.}(l1), f_{int.}(l1), f_{tex.}(l1), C\}$$

↓ reconstruction

$$T(l2) = \{f_{ide.}(l2), f_{int.}(l2), f_{tex.}(l2), C\}$$

次に上記の関係について、言語の具現形式の側面から捉え直してみると、大まかに  $f_{ide.}(lx)$  は命題に、 $f_{int.}(lx)$  はモダリティに、 $f_{tex.}(lx)$  は結束性指標に、 $C$  はテキストそのものに対応付けられると考えられる。従って、言語の具現形式から見た翻訳行為は、以下図1の通り模式化できる。

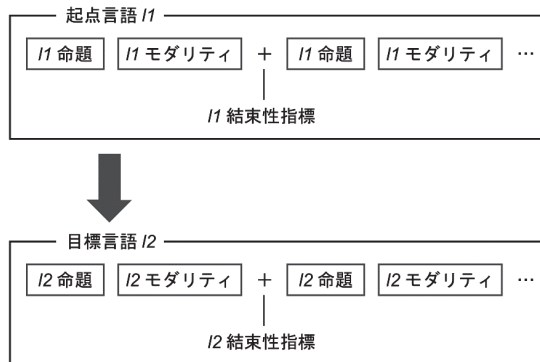


図1. 言語の具現形式から見た翻訳行為の模式図

以上のことから考えられるように、翻訳の難しさの根幹は起点言語の観念構成的機能（主として命題に反映）や対人的機能（主としてモダリティに反映）、テキスト形成的機能（主として結束性指標に反映）を目標言語に最適化した形で再構成することにあると言え、熟達した翻訳者は、これらの操作を無意識のうちに自動化していると言える。

これらの前提の下、本研究では中国語テキストから日本語テキストへの翻訳に関して（1）学習者が如何なる箇所でも困難さを感じるか、（2）その原因は何か、（3）各文の翻訳の難易度はどの程度か、の3点に対する示唆を得ることを目的として、筆者自身が翻訳講座に参加し、言わば参与観察のような形で専門の翻訳者のもとで翻訳を学び、SFL理論を主な視点としつつ筆者自身の産出物に対する分析と考察を行った。

## 2. 翻訳講座および分析資料

本研究において筆者が参加した翻訳講座は、日本橋報社・日中翻訳学院が主催する「高橋塾」である。高橋塾は、大東文化大学名誉教授の高橋弥守彦氏が講師を務め、出版翻訳のプロ人材の育成を目的とし、翻訳の基本テクニックの8項目「増訳・減訳・転成訳・倒訳・分訳・合訳・代替訳・換言訳」を学習する通信制講座である。高橋塾における学習は、下記のプロセスを一週間ごとに繰り返すという形式で実施される。

【step 1】 講師が翻訳する短編小説の一部分を学習者に配布する

(1～2段落程度の分量、5回で1編の短編小説の翻訳が完成)



【step 2】 学習者が各自で配布された課題を翻訳し、講師に返送する



【step 3】 講師が学習者の産出物を添削し、コメントおよび参考訳とともに学習者にフィードバックする

このような流れで、筆者は一年半の間に計10編の短編小説の翻訳に取り組んだ。翻訳課題として配布された短編小説は、中国の文化をテーマとした日本語総合月刊誌『人民中国』に掲載された作品の中から選ばれたものである(表1)。

表1. 翻訳課題の短編小説のタイトルと内容

No.	タイトル	あらすじ
1	《橋》 「橋」 (1994年7月号)	山裾を流れる川によって不便を強いられる子供たちのために、借金をして石橋を架ける先生。しかし村人に裏金受領の噂を立てられてしまう。後に疑念を晴らした先生は、県からの表彰状を川に流す。
2	《好大一隻鳖》 「大きなスッポン」 (1994年11月号)	ある日男の子は大きなスッポンを家に連れ帰る。やがて言葉が話せるようになったスッポンを多くの人が欲しがるが、母親は売ろうとしない。しかし誘惑に負け金持ちに売ったとたん、スूपにされてしまう。
3	《老二哥进城》 「農民街に出る」 (1988年6月号)	初めて北京に来た若者は、都会の生活に圧倒される。そこで街の人々になぜ流行の革靴を履かないのかと聞かれる。若者はその靴を作ったのは自分たちだと答え、皆を驚かせる。
4	《周岁》 「選び取り」 (1990年7月号)	満一歳の誕生日に行われる選び取りの儀式で、ピンピンは両親の思いと異なる小物を選ぶ。両親が怒ってやり直させると今度は期待通りのものを選ぶ。両親は大喜びして親戚に自慢しようとする。
5	《邻里情》 「ご近所さん」 (1988年2月号)	20年以上の長屋住まい。ご近所さんがご飯を分けてくれたことなど大切な思い出が詰まっている。今度の人事異動で引っ越すことになったとき、思い出すのは近所の人々との絆であった。
6	《杭州路10号》 「杭州路10番地」 (1988年8月号)	退屈な日々を送るオレは、遊びのつもりで架空の住所に手紙を出す。すると驚くことに返事が来た。一大決心をしてその女性に会いに行くと少し前に亡くなっていたが、この経験がオレの人生を変えた。

7	《邻居》 「お隣さん」 (1990年11月号)	新しいマンションで友人ができず、向かいの家を訪れるが冷たくあしらわれる。しかし彼が腹痛を起こした際に助けたことで親しい付き合いが始まり、過去の誤解の原因が明らかになる。
8	《微雕》 「ミニ彫刻」 (1991年5月号)	梁公は髪の毛一本に彫刻する達人で、人々にせがまれて家から作品を持っていく。後で、間違えて何の変哲もないただの髪の毛を見せたことに気づくが、敬服する人々の前で言い出すことができない。
9	《彩俑》 「彩色陶俑」 (1990年1月号)	息子の結婚祝いを買いたい王五オヤジ。よそ者の傘売りから、偶然持っていた焼き物が二対で高く売れると聞き、もう一つを買って戻ってくる。しかし時すでに遅く、焼き物は持ち去られてしまっていた。
10	《让儿子独立一回》 「親離れ」 (1997年10月号)	上海の名門大学に入学したきり連絡を寄こさない息子を心配する両親のもとに、ある日息子から手紙が届く。妻は大喜びするが、手紙の中身が領収書の束であることに気づいた夫は返事に窮する。

なおフィードバックされた参考訳は『人民中国』に掲載された専門の翻訳者による日本語対訳であり、講師による学習者産出物の添削は、基本的に、この参考訳に節・文構成や語調を沿わせる形で行われた。

本研究での分析に用いた資料は、(1) 高橋塾の上記 step 1 において配布された中国語原文、(2) step 2 において学習者＝筆者が作成した添削前の訳文(学習者訳文)、(3) step 3 においてフィードバックされた添削後の訳文、および(4) 参考訳(熟達者訳文)の4種である。なお(2) 学習者訳文は、基本的に原文直訳調の文体を有するものである。

### 3. 分析の手法と結果

本研究では、以下の(A)～(E)の手順により、翻訳プロセスにおける中国語－日本語間の差異に対する分析を行った。(A) 全50回分の中国語原文テキスト(上記1)・添削前の学習者訳文テキスト(上記2)・添削後の訳文テキスト(上記3)・熟達者訳文(上記4)の4種のテキストについて並列させた一覧表を作成する。(B) 一覧表上の各回のデータについて、添削前の学習者訳文テキストおよび添削後の訳文テキストを観察し、添削前と添削後で大幅に様相が変化している文または連文を抽出する。(C) 抽出された文または連文の中でも特に特徴的な差異を示すものを選出し、中国語原文・学習者訳文・熟達者訳文それぞれについて、対応する添削箇所をマーキングする。(D) マーキングされた添削箇所が、観念構成的機能・対人的機能・テキスト形成的機能のいずれの具現形式、すなわち命題・モダリティ・結束性指標のいずれに属する要素に相当するかを検討し分類する。(E) 3要素に分類された特徴的添削箇所をより詳細に観察し、各具現形式のサブカテゴリーを新たに設定し、さらに詳細な分類を行う。

上記の手法により最終的に設定された各具現形式のカテゴリーおよびサブカテゴリーは図2の通りであり、各カテゴリーに属する特徴的添削箇所を以下表2・表3・表4に示す。

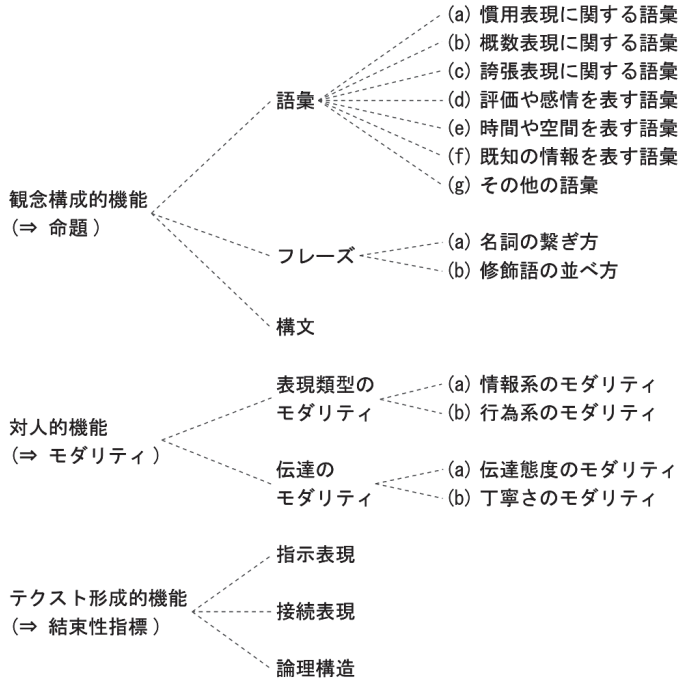


図2. 特徴的添削箇所が属するメタ機能および言語的具現形式のカテゴリー

表2. 観念構成的機能に関連する特徴的添削箇所

例文 No.	原文	学習者訳文	熟達者訳文
＜観念構成的機能 1-1-a：慣用表現に関する語彙＞			
1	星期天, 我穿戴整洁, 不轻不重, 敲了对门三下。(《邻居》)	日曜日、身なりを清潔にしたあと、 <u>軽くも重くもなく</u> ドアを三回ノックした。	日曜日、身なりを整えてから、 <u>強くもなく弱くもなく</u> 、向かいのドアをトントンと2回叩いた。
2	月缺月圆, 一连又过了多日, 王五老汉左盼右盼望眼欲穿, 就是不见那个文物商的人影影, 心中急得坐卧不安。(《彩俑》)	月が欠けたり満ちたりして、また何日も経った。王五オヤジは左右を見回し、目を凝らして待っていたが、あの古物商の姿はどこにも見えない。心中焦り、座っても立ってもいられなかった。	月の満ち欠けがあり、また何日か過ぎた。王五オヤジは気もそぞろに古物商を待ちわびているが、姿はまったく見えない。心中焦ってきて居ても立ってもいられない。
＜観念構成的機能 1-1-b：概数表現に関する語彙＞			
3	这两年, 村里娃子一下多起来, 赛着劲地长, 漫山漫野地疯。(《桥》)	<u>この二年間</u> 、村に子供が急が増えた。彼らは勢いよく成長し、至るところで狂っている。	<u>この数年間</u> で、村の子供たちは一気に増え、背丈を争うようになり、野や山でわんぱくぶりを発揮している。
4	他常听说这玩意儿日鬼到深圳香港能赚大钱, 说不定还能卖上 <u>十万八万</u> 的。(《彩俑》)	よく聞く話だが、このものを深センや香港に持って行けば大金が稼げるそう <u>だ</u> 。もしかしたら <u>八万や十万</u> も売れるかもしれない。	こういう代物はこっそり深圳や香港に運んで売れば、大金が儲かると常々聞いているが、ひよっとすると <u>9万や10万</u> でも売れるかもしれない。

＜観念構成的機能 1-1-c：誇張表現に関する語彙＞			
5	现在，他们要向平平的两大亲族去宣布这一具有历史意义的发现。《《周岁》》	そして今、彼らはこの歴史的な発見をピンピンの両方の親族に発表しようとしている。	今、両親は、双方の親戚に対し重要な意味を持つこの大発見を発表しようとしている。
6	这是发向天国的一封信，我颇为动情地向她诉说我的一切，其中包括所谓的爱情经历（实际上是对邻家女儿的单相思），包括待业始末，包括失去双腿双手的痛苦（这是撒谎！）。《杭州路10号》	これは天国に宛てた手紙で、僕は彼女にかなり感情的に訴えた。その内容が、いわゆる愛の経験(実際は隣の娘への片思い)から、就職待ちの顛末、両脚両手を失った苦しみ（これは嘘だ！）までだった。	これは理想の女性のいる天国に出す手紙だから、やや感情を込めて女神様にオレのすべてを訴える。その中には恋愛のことも(実際は隣家の女の子に片思いをしていたのだ)、就職待ちのことも、両手両足を失った苦しみ(これは嘘だ！)も書いた。
＜観念構成的機能 1-1-d：評価や感情を表す語彙＞			
7	娘只好托邻帮的帮看摊，随了儿子去。《《好大一隻鳖》》	お母さんは仕方なくお隣さんに店番を頼んで、息子の後を追うことにした。	母親は隣の人に店番を頼み、子供についていった。
8	梁公特意蓄了胡须，留了长发，这就颇具艺术家的气质。《《微雕》》	梁じいさんはわざわざ髭を生やし、髪を長く伸ばして、いかにも芸術家という気質である。	ひげを蓄え、髪を長くした梁公は芸術家そのものである。
＜観念構成的機能 1-1-e：時間や空間を表す語彙＞			
9	史工程师比当年自己考取大学要高兴得多，满脸的阳光，满脸的春色。《《让儿子独立一回》》	史エンジニアは自分が当時大学に合格したときよりもずっと喜んでた。顔いっぱい喜びだった。	エンジニアの史さんは自分が大学に受かった時よりもずっと嬉しかった。喜色满面、春色満面だ。
10	吃饭的时候，我忽然想出这样一种游戏：闭上眼睛在心里描绘自己所要寻找的女孩的模様，然后，把她当做自己的上帝，向她诉说自己的苦恼。《《杭州路10号》》	食事の時、私はふとこんな遊びを考え出した。目を閉じて心の中で自分の探している女の子の姿を描いて、それから、彼女を自分の神様として、彼女に自分の苦悩を訴える。	ご飯を食べているとき、ふとある遊びを思いついた。目を閉じて理想とする女の子の姿を思い描く、それから、この少女を自分の女神様に見立て、自分の悩みを訴える。
＜観念構成的機能 1-1-f：既知の情報を表す語彙＞			
11	她指了指桌子让我看。《《杭州路10号》》	おばあさんはテーブルを指さして見せてくれた。	おばあさんは机を指さした。
12	妻一边问既往史，一边在李老头脚上扎银针，又用艾条给他灸腹部。《《邻居》》	妻は過去の経歴を聞きながら、李さんの足に銀針を刺し、よもぎで腹部にお灸をすえた。	妻は李さんに以前かかった病気のことを聞きながら、足に鍼を打ち、お腹に灸をすえた。
＜観念構成的機能 1-1-g：その他の語彙＞			
13	邻居们全都熄灯睡觉了，我轻轻地打开了公用厨房的门，揭开锅盖一看，惊呆了：满满一锅绿豆粥，尝一尝，甜丝丝的，不热不凉正好喝。《《邻里情》》	隣人たちがみんな寝てしまったので、私はそっと共同台所のドアを開けて、鍋を開けてみると、なんと鍋いっぱいの绿豆粥だった！甘くて、熱くもなく冷たくもなくちょうどよい。	共同炊事場のドアをソッと開け、鍋のふたをとって驚いた。绿豆粥が鍋いっぱい作ってあるのだ。ちょっと食べてみると、ほんのり甘く、熱くもなく冷めてもなく、ちょうど食べごろだ。
14	我的血液开始变凉。《《杭州路10号》》	血が冷たくなってきた。	身体が冷たくなってきた。
15	文物商临走时把这个彩陶和一个红包放在虎娃家中，让如此如此，这般这般……《《彩俑》》	古物商は出発する前に、彩陶とお年玉を黄虎の家に置いて、こうしてこうして、ああしてああして……	古物商は帰りがけに黄虎の家に彩陶と手間賃を渡し、かくかくしかじか、これこれこのようにと指図し……
16	为了搞好关系，他买了一箱冰淇淋，凡那天在他宿舍的，不管是同学老师，还是他们的父母、朋友，一概由他请了。《《让儿子独立一回》》	人間関係を良くするために、一箱のアイスクリームを買って、その日寮にいた人々、同級生や先生、彼らの両親や友人など、全員を招待した。	みんなとの関係を良くするために、アイスクリームを一箱買い、その日寮にいた学生と教員、その両親や友人に配った。

＜観念構成的機能 1-2-a：名詞の繋ぎ方＞			
17	先生听说后，就把家里的老犍拉出来。《《桥》》	それを聞いた先生は、家の老いた牛を引っ張り出した。	先生はその話が伝わってくる、家で飼っている老牛を引っ張り出してきた。
18	梁公愕然，它扬了扬手中的锦盒，正待发问，儿子却笑了：《《微雕》》	梁公が愕然として、手の中の錦の箱を持ち上げ、質問しようとする、息子は笑った。	梁公は愕然とした。手に持った錦の箱を揚げて、何か尋ねようとする、息子が笑った。
＜観念構成的機能 1-2-b：修飾語の並べ方＞			
19	每天，娃子会把一串串沉甸甸的笑声甩在石桥上；每天，①两岸②盖着长胡子的③老爷子会在夕阳西下之际，踱到石桥上，把儿多往事摞在旱烟锅里，烧得吱吱啦啦地响；《《桥》》	毎日、子供はどっしりとした笑い声を石橋に残す。毎日、①兩岸の②ひげを生やしている③おじいさんは、夕日が沈むと、石橋の上を歩き、幾多の昔のことを煙館に押しつけ、ギシギシと焼く。	毎日、子供たちは元気いっぱいの笑い声を石橋でまき散らしている。夕日の沈むころ、②髭の伸びた①兩岸の③老人たちが毎日ブラブラと石橋までやってきて、いろいろな思い出の詰まったキセルをプカプカと吹かしている。
20	给人家观赏了半天的竟是没过门儿的①儿媳的②一根普通的③头发！《《微雕》》	長い間人に見せているのは、①息子のいいなづけの②普通の③髪の毛だった！	代表たちに長い間見てもらっていたのは、②ごくありふれた①息子の許嫁の③髪の毛だったのだ。
＜観念構成的機能 1-3：構文＞			
21	学堂摆在河北岸的山坡上，山上有花有草，河里有鱼有虾，环境很优美。《《桥》》	学堂は北岸の丘に置かれ、山には花や草があり、川に魚やエビがいて、環境はとても美しい。	学校は北岸にある山の中腹に建てられた。山には草や花があり、川にはエビや魚がいて、とてもいい環境だ。
22	娘俩跑到海滩上，见到两位渔民正抬了一只鳖行走。《《好大一鳖》》	海岸に駆けつけると、二人の漁師がスッポンを担いで歩いているのを見た。	母子二人が浜辺まで走って来ると、漁師が二人でちょうどスッポンを担いで引き上げるところだった。

表3. 对人的機能に関連する特徴的添削箇所

例文 No.	原文	学習者訳文	熟達者訳文
＜对人的機能 2-1-a：情報系のモダリティ＞			
23	在一根头发丝上刻一首诗，且配画，且笔力道劲，且画境隽永。以天下之大，负此种绝技者能有几人？而梁公便是一个。《《微雕》》	そんな技を持つ人が、この世に何人いるだろうか。	この世の中がいくら広いからといって、この絶技を持っている者はごくわずかしかない。
24	病床上的她念念不忘的是儿子开学在即，自己将不能亲自送儿子去大学，这叫她如何放心得下？《《让儿子独立一回》》	病床で忘れられないのは、息子がもうすぐ入学するということ、自分は息子を大学に送り届けることができないということだ。これではどうやって安心できるのだろうか？	病床の妻は息子のことを常に案じていた。もうすぐ子供の入学式だというのに、自分が息子を大学まで送ってやれないのが、心配だというのだ。
＜对人的機能 2-1-b：行為系のモダリティ＞			
25	比如：“粮店卖三号大米，快去排队。”（中略）“大商店有排骨，快去买。”《《邻里情》》	例えば、「米屋が三番の米を売っているから、はやく並んで」（中略）「大きい店にはスペアリブがあるから、早く買いに行きなさい」のように情報が豊富なおかげで、私たちの食卓は豊かになった。	「お米屋さんで三号米を売っているから、早く行って並んだら。」（中略）「大店に豚のバラ肉があるわ、早く買いに行かないとなくなるわよ。」など。



＜对人的機能 2-2-a：伝達態度のモダリティ＞			
26	“是该值一万。”谁知这文物商根本就不打价，他把彩陶拿在手中仔细端详了一阵子，一本正经地说：“按说要一万也不多，只是这彩陶本来是一对儿，一个就不值多少钱了。”（《彩俑》）	「これは一万元の価値がある」と古物商は全く値段をつけず、焼き物を手に取り、しばらくじっくりと見た後、「一万元も高くないが、この焼き物は元々ペアだったので、一つだけではあまり価値がない」と真剣に言った。	「一万の値打ちはある <u>な</u> 。」古物商が値切らなかつたのは意外であった。彩陶を手に取り、しげしげと眺めていたが、「本来ならば、この彩陶はもともと一對なので、一万でも高くはないが、一つではいくらにもならん <u>な</u> 。」ともっともらしく言った。
27	“可俺这大包里，大大小小好几双呢。”（《老二哥进城》）	「でもこのバッグには、大きいものと小さなもの何足も入っていますよ」	「でも、 <u>オレ</u> のおっきなカバンにゃ、大きい <u>の</u> や小さい <u>の</u> が何足もあるんだ <u>ぜ</u> 。」
28	“噢，舍不得腰包里的硬通货，留着下小的吧？万元户哥们儿？”一个挺“港”的姑娘插上两句。（《老二哥进城》）	「ああ、財布の中の硬貨が惜しくて、残して小さいのを出すのか。万元のお兄さん？」香港人っぽい女の子が口を挟んだ。	「 <u>あら</u> 、お金を使うのが惜しいんじゃない <u>の</u> 、それだったら取っておいて子どもを産ませたら？ <u>成金のお兄さん、どうなの？</u> 」おしゃれな娘が口をはさんだ。
29	小男孩的娘笑笑说，这是孩子的灵物，救了孩子，多少钱都不卖。（《好大一整》）	母親は、それは子供の霊物で、子供を救ったから、いくらでも売らないと笑いながら返した。	母親は笑って、このスッポンはうちの子の守り神じゃ、子供を救ってくれたからね、どんなにお金を出されたって売らないわよ、と言っていた。
30	于是，南岸就有人来找先生，遣他也管管南岸的娃子。先生很高兴。（《桥》）	そこで、南岸の人も先生に尋ねてきて、こっちの子供も見てもいいと。先生は嬉しく応えた。	そこで、南岸の人は先生を訪ね、 <u>わしら</u> の子供も面倒見てもらいたいんです <u>のう</u> 、と頼みに来た。すると、先生はたいそう喜ばれた。
31	孩子的祖母高声嚷，孩子伸手乞盐呢。（《好大一整》）	子供の祖母が、子供は手を伸ばして塩を乞うと大声で騒いだ。	ばあちゃんが大声で、この子が手を出すのは塩を欲しが <u>ら</u> ると <u>ん</u> じゃ。
32	两位渔民似信非信，最后对孩子的娘说，要不这样吧，你给我们一百块钱，我们把鳖让你算了。（《好大一整》）	漁師は半信半疑で、最後に母親に向かって、「こうすればどうでしょうか。百元をいただくと、スッポンを譲ってやります」と言った。	二人の漁師は半信半疑の様子だったが、あげくに母親へ向かって、それならこうしよう。 <u>わしら</u> に百元 <u>おくれ</u> 、それでスッポンは <u>お前さんたち</u> に渡そう。
＜对人的機能 2-2-b：丁寧さのモダリティ＞			
33	她转过身去，从书柜里拿出一沓信封款式相同的信，声音蓦然喃喃：“人，死了，已经有两个多月了，这些信，让我每个月寄一封……”（《杭州路10号》）	おばあさんは背を向け、本棚から同じデザインの封筒を一束取り出した。「人が、なくなり <u>まし</u> た。もう二ヶ月以上になり <u>ます</u> 。この手紙、毎月一通ずつ送るよ <u>うに</u> ……」	おばあさんは背中を向けると、本棚から同じ封筒を使った手紙の束をとりだし、急に声を曇らせた。「あの人は亡くなった <u>ん</u> で <u>すよ</u> 。もうふた月あまり前にな <u>るわ</u> 。手紙を毎月一通ずつ出すよ <u>うに</u> ……」
34	妈妈赶忙抱起平平拍哄着：“大热天，别招他哭，给孩子吃嘛。刚才那次——不算。”（《周岁》）	ママはあわててピンピンを抱き上げ、「暑いから、泣かせないで、おやつを <u>あげよう</u> 。さきのは——なしね。」と撫でてあやした。	ママは慌ててピンピンを抱き上げると、「こんなに暑い日なんだから、泣かせないで、ピンピンに食べさせて <u>あげましょ</u> うよ。さっきのは——なしね。」とあやした。

表4. テキスト形成的機能に関連する特徴的添削箇所

例文 No.	原文	学習者訳文	熟達者訳文
<p>〈テキスト形成的機能 3-1：指示表現〉</p>			
35	<p>“就知道吃！”平平爸恼怒地一把夺下糖。平平妈嘔嘔了半天，那忌讳而不吉利的字眼总算没出口。这一夺一嘔，平平只剩下咧嘴哭的份了。《《周岁》》</p>	<p>「食べるばかり！」ピンピンの父親は、困ったようにお菓子をひったくった。ピンピンの母親は長い間舌打ちを入れたが、タブーとされる不吉な言葉は出てこなかった。このひったくりと舌打ちによって、ピンピンにできることは、ニヤニヤと泣くことだけだった。</p>	<p>「食べることしか能がないのか！」パパは怒って取り上げる。ママはしきりに舌打ちするが、誕生日の場にふさわしくない言葉は何とか抑える。チョコレートを取り上げるパパ、舌打ちするママ、ピンピンはエーンエーンと泣くしかなかった。</p>
36	<p>搬进新楼住了半年，同一楼的对门邻居姓什么都不知道。一天到晚，那门关得铁紧。这使我怀念以前住的平房大院。《《邻居》》</p>	<p>新しい建物に移ってきて三年になるが、同じ階の隣人の名さえ知らない。一日中、扉は固く閉ざされている。昔住んでいた平屋の庭が懐かしい。</p>	<p>新しいマンションに引っ越してから半年たつが、お向かいさんが何という名前なのかさえ知らない。朝から晩まで向かいのドアはしっかりと閉じられている。近所づきあいのないことが以前住んでいた庭を囲んだ平屋の家を懐かしく思わせる。</p>
<p>〈テキスト形成的機能 3-2：接続表現〉</p>			
37	<p>到家，娘不在。他又跑到菜场，娘在卖菜。《《好大一隻蟹》》</p>	<p>家に着いて、お母さんはいなかった。彼はまた八百屋(市場)に行き、お母さんが野菜を売っていた。</p>	<p>帰ってみると、おっかさんが家にはいない。男の子は、今度は野菜市場へ走って行ってみると、おっかさんは野菜を売っていた。</p>
38	<p>这天晚上，我和妻刚睡下，忽然听到呻吟声，那声音是对门传来的。《《邻居》》</p>	<p>その夜、妻と寝たばかり、突然うめき声が聞こえた。その声はドアの向こうから伝わってきた。</p>	<p>その晩、私と妻が眠りにつくと、突然うめき声が聞こえてきた。声は真向かいからだ。</p>
39	<p>几天之后，我正躺在床上看书，突然一阵急切地敲门声把我惊醒。《《杭州路10号》》</p>	<p>数日後、ベッドで横になって本を読んでいるところ、急にドアをノックする音がして驚いた。</p>	<p>数日後、ベッドに寝転んで本を読んでいると、慌ただしくドアをたたく音がするので、飛び起きた。</p>
40	<p>上楼的时候，孩子说：“现在要是有一锅甜粥，我能一气把它吃光。”《《邻里情》》</p>	<p>階段を上がるとき、子どもが「今、甘いお粥があったら、一気に食べてしまうわ。」と言った。</p>	<p>階段が上がっていると、子どもが「今、鍋いっぱいのお粥があれば、ペロリと平らげてしまうんだけどなあ。」と甘えてきた。</p>
41	<p>下车后又渴又累，想在街上吃点什么吧，走了几家饭馆，偏偏都不中意。《《邻里情》》</p>	<p>バスを降りた後、喉が渇き、疲れていたので、路上で何か食べようと思って、レストランを何軒か歩いたのだが、どれも気に入らなかった。</p>	<p>車を降りると、喉がカラカラでグツリ疲れていた。街で何か食べようと思って、レストランを何軒か覗いたが、どれも気に入らない。</p>
42	<p>小男孩四周望了望，海滩空旷无人。《《好大一隻蟹》》</p>	<p>男の子は周りを見渡し、海岸はがらんとして誰もいない。</p>	<p>男の子は周りを見渡したが、広々とした海岸には人っ子一人いない。</p>
43	<p>几乎是磨破了嘴皮子，好说歹说，妻才十分勉强十分不愿意地不再持反对票。《《让儿子独立一回》》</p>	<p>口を酸っぱくして説得し、ようやく妻は渋々反対しないことにした。</p>	<p>口が酸っぱくなるほど説き伏せたので、妻はしぶしぶ夫の意見に同意した。</p>

44	娘只好托隔邻的帮看摊，随了儿子去。原来，她生这个儿子时，一开始就难产。《《好大一隻》》	お母さんは仕方なくお隣さんに店番を頼んで、息子の後を追うことにした。もともと、この子を産んだとき、最初から難産だった。	母親は隣の人に店番を頼み、子供についていった。実は、この子を産むとき難産だったのだ。
45	不错，是只灵鳖，让孩子开口讲了话，救了孩子的一生。不过孩子已经会讲话，也算是物尽其用。《《好大一隻》》	確かに、子供に口をきかせて、子供の一生を救った霊験あらたかなスッポンだが、子供はすでに喋れるし、その用を發揮し尽くしたと言えよう。	間違いのないわ、このスッポンには霊験があるのよ。子どもが口をきけるようになったし、子供の一生を救って下さった。でも、この子はもう話せるようになったのだから、ご利益は頂いたわ。
46	据有关人士透露，先生的材料不过硬——没有背娃过河之伟任！《《桥》》	関係者によると、先生の資料はしっかりしていない——子供を背負って川を渡る偉任はないという。	関係者の話では、先生の資料には決定打——子供を背負って川を渡る献身的な行為がなかったからだ、そうだ。
《テキスト形成的機能 3-3：論理構造》			
47	这时，①南岸的家长便不让娃去学堂，②家长说往后会得关节炎的。《《桥》》	こんなとき、①南岸の親は子供を学校に行かせない。②後で関節炎になるからだという。	この頃になると、②南岸の親は子供が関節炎になってしまうから、①学校に行かせるのを渋る。
48	①突然小男孩撒腿就跑，②他要回家叫娘来帮把手。《《好大一隻》》	①突然走り出して、②お母さんに手伝ってもらおうと家に走って帰った。	②おっかさんを読んできて助けてもらおう、①男の子はバツと駆け出した。
49	他寻思，给娃买个彩电什么的。怎奈那彩电①由一千多元一下子猛涨到三千，②像坐上直升飞机。《《彩筒》》	息子にカラーテレビか何かを買ってやろうと思った。ところが、カラーテレビの値段が①千円あまりから三千元に値上がり、②まるでヘリコプターに乗ったようだ。	息子にカラーテレビなどを買ってやろうと思ったが、いかんせんカラーテレビは②ヘリコプターのように千円台から三千元へと、①あっという間に急騰している。
50	①儿子真是争气，②以全县高考总分第三名的好成绩被上海财经大学录取。《《让儿子独立一回》》	①息子は本当に頑張った。②県高校入試総得点第3位の成績で上海财经大学に合格した。	②全国大学統一入試で県内三番の好成績をとって上海财经大学に合格するなんて、①我が子ながらあっぱれだ。
51	①简直是出乎意外，②儿子很平静地说：“早该让我独立了。”《《让儿子独立一回》》	①意外なことに、②息子は落ち着いて言った。「もう独立させるべきだった。」	②息子が落ち着き払って「もっと早く独立させてくれればよかったんだよ。」と言ったのは、①まったく意外であった。

#### 4. 考察

##### 4-1. 中国語テキストと日本語テキストの差異の原因

本研究における中国語テキストと日本語テキストの差異の原因について考えるにあたり、各メタ機能の言語的具現形式のサブカテゴリーに分類・整理された特徴的添削箇所を観察し、(1) 直訳調の学習者訳文と流麗な熟達者訳文の差異は何であり、なぜ添削されたか、そして(2) 中国語原文と熟達者訳文では、如何なるかたちで文や節の形態が変化しているかという主な二点について検討した。そしてさらに、中国語テキストと日本語テキストの間で差異が生じるメカニズム、すなわち熟達した翻訳者が自動化している二言語間の変換操作について考察した。

まず全 51 件の例文全体を通して観察される中国語テキストと日本語テキストの特徴的

差異について考えてみると、それらの差異は表5に挙げる12項目に整理される。

表5. 中国語テキストと日本語テキストの特徴的差異

		中国語	日本語
1		修飾節内においてより中心的な修飾語を先に提示する	修飾節内においてより中心的な修飾語を後に提示する
2		修飾節内の体言間および節間の結合が比較的弱い	修飾節内の体言間および節間の結合が比較的強い
3		より直接的な表現を好む	より間接的な表現を好む
4		動詞や形容詞で語る（語順言語的語り）	名詞で語る（助詞言語的語り）
5	A	指示表現＞接続表現により結束性を保持する	指示表現＜接続表現により結束性を保持する
6		連続構造を好む	埋め込み構造を好む
7		結論を先に提示する	結論を後に提示する
8		明示された情報を可能な限り多く提示する	暗示された情報を可能な限り少なく提示する
9		明確さをより重視する	流麗さをより重視する
10		客観的な語りの指標を通して対象（主として登場人物）の特性を提示する	主観的な語りの語尾を通して対象（主として登場人物）の特性を提示する
11	B	全知の語り手を設定する（知覚者と非知覚者を区分しない）	非全知の語り手を設定する（知覚者と非知覚者を区分する）
12		客観的な視点から誇張して語る（語りの場は客観的雰囲気を持つが、語り手は語りを主観的に調整する）	主観的な視点から控えめに語る（語りの場は主観的雰囲気を持つが、語り手は語りを客観的に調整する）

表5中のカテゴリー（A）は、強い一般性（強い言語依存性）を持ち、語り手の前景化と関係しないタイプの差異であり、カテゴリー（B）は、強い個別性（強いテキスト依存性）を持ち、語り手の前景化と関係するタイプの差異であると言える。続いて、個々の具現形式のサブカテゴリーにおいて如何なる差異が観察され、それらが如何なるメカニズムにより生じたものであり、それらが表5の全体的傾向と如何なる関係にあるかを以下4-1-1から4-1-3までに整理した。

#### 4-1-1. 命題に関する具現形式

##### 4-1-1-1. 語彙

###### (a) 慣用表現に関する語彙

本カテゴリー（例文1、2）に関しては、“不轻不重”と「強くもなく弱くもなく」、 “月缺月圆”と「月の満ち欠けがあり」のように、中国語原文と熟達者訳文の間で並列構造の構成要素の配置が逆転するという現象が観察された。このような差異は、中国語では客観的な語りの視点から、事物の変化が発展順序に（弱→強、不完全→完全のように）従って提示されることが好まれるのに対して、日本語では主観的な語りの視点から、語り手にとっ

て価値の高いと判断される事物から先に（強→弱、完全→不完全のように）提示されることが好まれることに起因するものであると考えられる（表5の12に関連）。

#### **(b) 概数表現に関する語彙**

本カテゴリー（例文3、4）に関しては、“这两年”と「この数年間」、「十万八万」と「9万や10万」のように、中国語原文と熟達者訳文の間で提示される数字が一对一対応しないという現象が観察された。まず例文3における差異は、中国語における“两”という表現の一部が実数ではなく概数を表すことに起因するものである。類例を挙げてみると、中国語の“我说两句”や“过两天再说吧”が、日本語では「ふた言お話しする」や「二日経ってからにしよう」ではなく「ちょっとお話しする」「二、三日してからにしよう」と訳されるのも上記と同様の理由による。次に例文4における差異は、中国語の概数表現が隣り合う数字のみならず一定の幅を持つことも許容され、さらに数字の並べ方に関しても「小→大」のみならず「大→小」も可能であるのに対して、日本語の概数表現では隣り合った数字を「小→大」のように並べることが一般的であることに起因するものであると考えられる（表5の12に関連）。

#### **(c) 誇張表現に関する語彙**

本カテゴリー（例文5、6）に関しては、“具有历史意义的”と「重要な意味を持つ」、「颇为」と「やや」のように中国語原文と熟達者訳文の間で使用される修飾語や程度副詞が一对一対応せず、なおかつ熟達者訳文において表現のトーンが下がるという現象が観察された。このような差異は、中国語では古来より「誇張（デフォルメ）表現」が好まれ、多くの場面で使用されるのに対し、日本語では誇張表現よりも「実写表現」が好まれる傾向があること（高橋、2020）に起因するものであると考えられる（表5の12に関連）。

#### **(d) 評価や感情を表す語彙**

本カテゴリー（例文7、8）に関しては、中国語原文にある“只好”（仕方なく）のような評価副詞や“特意”（わざわざ）のような方式副詞が、熟達者訳文では省略されるという現象が観察された。これに関連して近藤（2018）では、日本語においては一般的に、感情・感覚・評価性形容詞（嬉しい・痛い・素晴らしいなど）に人称制限があることから分かる通り、話し手の内面の感覚や感情などは話し手だけが知覚できることであると捉えられ、知覚者自身は言語化の対象にならないと指摘されている。このことから上記のような差異は、中国語では知覚者と非知覚者を区分せず、多くの感情情報を主観的かつ明示的に提示する傾向があるのに対し、日本語では知覚者と非知覚者を区分し、客観的な情報描写が好まれ、知覚者が認識する以上の感情情報の提示を好まない傾向があることに起因するものであると考えられる（表5の11、12に関連）。

### (e) 時間や空間を表す語彙

本カテゴリー（例文9、10）に関しては、中国語原文にある“当年”（当時）のような時間を表す語彙や“在心里”（心の中で）のような空間を表す語彙が、熟達者訳文では省略されるという現象が観察された。このような差異は、中国語ではより多くの情報を明示することにより具体性や明確さをもたらすことに重きを置く傾向があるのに対し、日本語ではコンテキストから読み取れる情報を可能な限り省略することにより冗長性を排除し、流麗さをもたらすことに重きを置く傾向があることに起因するものであると考えられる（表5の8、9に関連）。

### (f) 既知の情報を表す語彙

本カテゴリー（例文11、12）に関しては、“指桌子让我看”と「机を指さした」、「用艾条给他灸腹部」と「お腹にお灸をすえた」のように中国語原文中に存在する一部の語彙が熟達者訳文では省略されるという現象が観察された。このような差異は、上記カテゴリーeと同様に、中国語ではより多くの情報を明示することにより具体性や明確さをもたらすことに重きを置く傾向があるのに対し、日本語では自明な情報を省略することにより冗長性を排除し、流麗さをもたらすことに重きを置く傾向があることに起因するものであると考えられる（表5の8、9に関連）。

### (g) その他の語彙

命題に関する具現形式については、上記の6カテゴリー以外にも特徴的な翻訳事例が観察された（例文13-16）。まず、翻訳前後でコンテキストに沿ったメトニミー関係にある語彙に置換されている事例である。メトニミー（metonymy、換喩）とは、近接性に基づく連想から、あるものを別のもので指し示す認知プロセスを指す（河上、1996; 靱山、2010）。例文13では中国語原文中の単語“锅”が熟達者訳文では「鍋のふた」に、例文14では“血液”が「身体」に変換されている。すなわち、前者では「全体→部分」方向でのメトニミー表現への変換が、「部分→全体」方向でのメトニミー表現への変換が行われている。

次に、翻訳前後でコンテキストに沿った上記の関係以外の関連語彙に置換されている事例である。例文15では中国語原文中の単語“红包”が熟達者訳文では「手間賃」に変換されている。これは「古物商が人に頼みごとをするために、物品とお金を渡す」というコンテキストを踏まえた場合、「お年玉」よりも「手間賃」の方がより適切な訳語であるという判断に基づくものである。また例文16では“请”が「招待する」ではなく「配る」に変換されている。これは「寮生活を始める息子が他人との人間関係を良好に保つために、周囲の人々にアイスクリームを奢る」というコンテキストを踏まえたものである。このような差異も上記a～fの各カテゴリーと同様に、中国語と日本語における認知プロセスの差異、換言すれば世界認識の差異に起因するものであると推測される。

#### 4-1-1-2. フレーズ

##### (a) 名詞の繋ぎ方

本カテゴリー（例文 17、18）に関しては、中国語原文にある名詞を繋ぐ助詞“的”が、熟達者訳文ではそのまま日本語の「～の」に置換されるのではなく、「～している」「～した」といった連体修飾語としての関連動詞が追加されるという現象が観察された。例文 17 では“家里的老犍”が「家の老牛」ではなく「家で飼っている老牛」、例文 18 では“手中的锦盒”が「手の中の錦の箱」ではなく「手に持った錦の箱」のように訳出されている。これに関連して西山（2003:16）では、日本語の「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>」には多様な意味があり、典型は「修飾語 NP<sub>1</sub>が、主要語 NP<sub>2</sub>の限定詞もしくは付加詞になっており、NP<sub>1</sub>と NP<sub>2</sub>のあいだに、＜前者が後者と関係 R を有する＞という意味をもつケースである」と指摘されている。このように、上記の差異は日本語における NP<sub>1</sub> - NP<sub>2</sub> 間の結びつきが多義的であることに起因すると推測される。従って翻訳を行う際には、学習者訳文のように中国語原文の“NP<sub>1</sub>的 NP<sub>2</sub>”を「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>」というようにそのまま訳出するのではなく、関係を有する動詞を明示して訳出する必要がある（表 5 の 2 に関連）。

##### (b) 修飾語の並べ方

本カテゴリー（例文 19、20）に関しては、中国語原文と熟達者訳文の間で一部の修飾節を構成する修飾語の配置が変化するという現象が観察された。例文 19 の中国語原文中の修飾節、“两岸蓄着长胡子的老爷子”における“老爷子”（老人たち）に対する修飾語の順序は「①两岸の→②髭の伸びた→老人たち」であるが、熟達者訳文では「②髭の伸びた→①两岸の→老人たち」となっている。同様に、例文 20 の“儿媳的一根普通的头发”における“头发”（髪の毛）に対する修飾語の順序は「①息子の許嫁の→②ごくありふれた→髪の毛」であるが、熟達者訳文では「②ごくありふれた→①息子の許嫁の→髪の毛」となっている。これに関連して今富（1973）は、修飾語と被修飾語の語順に関して、中国語では「①所属→②描写・説明・限定→③下位名詞」となるのに対して、日本語では「②描写・説明・限定→①所属→③下位名詞」となると指摘している。このことから上記のような差異は、中国語ではより重要で中心思想と関連する修飾語が先に提示される傾向があるのに対し、日本語ではそれが後に提示される傾向があることに起因するものであると考えられる（表 5 の 1 に関連）。

#### 4-1-1-3. 構文

本カテゴリー（例文 21、22）に関しては、中国語原文と熟達者訳文の間で構文を構成する文の種類が変化するという現象が観察された。例文 21 の中国語原文中の一節、“环境很优美”（環境はとてもいい）は形容詞述語文であるが、熟達者訳文では「とてもいい環境だ」のように名詞述語文で処理されている。また、例文 22 の“见到两位渔民正抬了一只鳖行走”（二人の漁師がスッポンを担いで歩いているのを見た）は動詞述語文であるが、熟達者訳文でも「漁師が二人でちょうどスッポンを担いで引き上げるところだった」のように

名詞述語文で処理されている。これに関連して、中日両言語の構文における相違について考察した賈（2011）では、両者の表現上の最たる特徴の一つとして、中国語が動詞文を好むのに対して日本語は名詞文を好むことが指摘されている。このような差異は、中国語が連続構造を好む語順言語であるのに対し、日本語は埋め込み構造を好む助詞言語であることに起因するものであると考えられる（表5の4に関連）。

#### 4-1-2. モダリティに関する具現形式

##### 4-1-2-1. 表現類型のモダリティ

###### (a) 情報系のモダリティ

本カテゴリー（例文 23、24）に関しては、疑問のモダリティ（疑問文）を使用して表現されている中国語原文の一節が、熟達者訳文では叙述のモダリティ（平叙文）を使用して処理されるという現象が観察された。例文 23 の中国語原文の一節、“负此种绝技者能有几人？”（この絶技を持っている者が、何人いるのだろうか？）が熟達者訳文では「この絶技を持っている者はごくわずかしかない」のように処理され、例文 24 では“负这叫她如何放心得下？”（これではどうやって安心できるのだろうか？）が「心配だというのだ」のように処理されている。このような差異は、中国語においては語り手の主張を聞き手に強く訴求するための表現形式（例えば反問文など）が多用される傾向があるのに対し、日本語においては聞き手に向けて情報や判断などを淡々と伝達するための表現形式が多用される傾向があることに起因するものであると考えられる（表5の12に関連）。

###### (b) 行為系のモダリティ

本カテゴリー（例文 25）に関しては、行為要求のモダリティを使用して表現されている中国語原文の一節が、熟達者訳文では勧誘のモダリティを使用して処理されるという現象が観察された。例文 25 の中国語原文中の一節、“快去排队”（はやく行って並んで）や“快去买”（早く買いに行きなさい）は依頼や命令の表現形式であるが、熟達者訳文では「早く行って並んだら」「早く買いに行かないとなくなるわよ」のように勧誘や助言の表現形式で処理されている。これに関連して、日本語記述文法研究会編（2003：66）では、主として日本語表現において「聞き手に行為の実行を求めることは、話し手が聞き手に負担を課すことになる」と指摘されている。このことから上記のような差異は、中国語では直接的な表現が好まれる傾向があるのに対し、日本語では聞き手の負担となり得る直接表現よりも、間接表現（婉曲表現）が好まれる傾向があることに起因するものであると考えられる（表5の3、12に関連）。

##### 4-1-2-2. 伝達のモダリティ

###### (a) 伝達態度のモダリティ

本カテゴリー（例文 26-32）に関しては、中国語原文には直接的表現があまり見られない「役割語」が熟達者訳文では主に終助詞や人称詞、感動詞という形で付加されるという現象



が観察された。金水（2003；2014）に従えば、役割語とは作品中の特定の人物を想起させる特徴ある話し方のことを指し、その種類は「性差」「年齢・世代」「職業・階層」「地域」「時代」「人間以外」といった下位カテゴリーに細分される。

まず「性差」に着目すると、例文 26 の熟達者訳文では、「聞き手に対するくだけた確認を表す」（日本語記述文法研究会編、2003:261）「男ことば」としての終助詞「な」が使用されており、例文 27 では、同様に「男ことば」としての人称詞「オレ」や終助詞「ぜ」が使用されている。一方、例文 28 では感動詞「あら」や終助詞「の」、例文 29 では終助詞「わ」といったように「女ことば」としての各種役割語が使用されている。

次に「年齢・世代」「地域」に着目すると、例文 30 の熟達者訳文では人称詞「わしら」や助詞「～のう」といった「老人語」を使用して田舎のおじいさんの雰囲気、例文 31 では「～とるんじゃ」のように補助動詞「おる」と助動詞「じゃ」を使用して年配の女性（ばあちゃん）の雰囲気を生起させている。また、例文 32 では「わしらに～おくれ」「～お前さんたち～」という表現からも読み取れるような「労働者言葉」を使用することで、このセリフの発話主体が漁師であることを明示している。

上記のような役割語使用の有無に関しては、中国語では主としてテキスト中の所要所に配置された語りの指標を通して作中人物の特性を提示するのに対し、日本語では主として語りの語尾を通して作中人物の特性を提示するという差異に起因するものである（表 5 の 10 に関連）。

## (b) 丁寧さのモダリティ

本カテゴリー（例文 33、34）に関しては、中国語原文には直接的表現が存在しない丁寧体が熟達者訳文では使用され、さらに普通体と丁寧体を交えた形で処理されるという現象が観察された。このような丁寧さのモダリティに関する基本的な差異は、中国語では人称代名詞や親族名称、使役構文などを通して作中人物間の「上下関係」や「親疎関係」を明示化するのに対し、日本語では普通体と丁寧体のスタイル選択を通して作中人物間の「上下関係」や「親疎関係」を明示化することに起因するものであると考えられる（表 5 の 10 に関連）。また、日本語における丁寧体と普通体は話し手と聞き手の距離を調節するのに非常に重要であり、同一の熟達者訳文内における普通体と丁寧体のスタイルシフトは、同一の作中人物間（例文 34 においては夫婦間）に社会的関係上の「親しさ」と一定の「上下関係」が共存していることも影響していると推察される。

### 4-1-3. 結束性指標に関する具現形式

#### 4-1-3-1. 指示表現

本カテゴリー（例文 35、36）に関しては、中国語原文では指示表現“这”（+ + 動詞）によって表現されている後件③における前件①②との照応箇所が、熟達者訳文では先行文脈（前件の内容の一部）の要約という形で処理されるという現象が観察された。例文 35 の中国語原文中の一節、“这一夺一喷”（この取り上げと舌打ち）が熟達者訳文では「チョコ

レートを取り上げるパパ、舌打ちするママ」のように処理され、例文 36 では“这”（これ）が「近所づきあいのないこと」のように処理されている。このような差異は、中国語が連続構造を好む語順言語であるのに対し、日本語は埋め込み構造を好む助詞言語であることに起因するものであると考えられる（表 5 の 4、6 に関連）。

#### 4-1-3-2. 接続表現

本カテゴリー（例文 37-46）に関しては、中国語原文では節と節を並列することにより複数節の繋がりを保持している箇所が、熟達者訳文では非並列関係を示す接続表現が使用されるという形で処理されるという現象が観察された。これに関連して、節と節（または文と文）を繋げる際、中国語では並列構造が好まれるのに対し、日本語では従属構造が比較的多用される傾向がある（橋本、2020a）ことが指摘されている。中国語で並列構造を構成する際には、節と節の論理的関係があまり明示されない「意合法」（劉ほか、1996）や、節と節をそのまま並べていく「流水文」（橋本、2020a）が好まれる傾向がある。また橋本（2020b）は、日本語で並列構造を構成する際には「テ形」や「連用形」が使用され、従属構造を構成する際には「ト形」が使用されると指摘している。例文 37 では、学習者訳文において中国語原文の並列構造に合わせる形で「家に着いて」「～行き」というテ形や連用形が使用されている箇所が、熟達者訳文では「帰ってみると」「～走って行ってみると」のようにト形で処理されている。このほか陳（2001）は、日本語の「ト」と中国語との対照関係に関する調査の結果として、「ト」と対応する中国語の言語形式を「時」系、「後」系、「就/便」系、（如果）＋（的話）系、「無対応」の 5 つの項目に分類している。例文 38 の中国語原文における「剛～」（～したばかり）、例文 39 における「正～」（～しているところ）、例文 40 における“～的时候”（～とき）、例文 41 における“～后”（～あと）のいずれも熟達者訳文ではト形で処理されている。

ト形以外の従属構造を構成する接続表現によって処理されている例も複数観察された。例文 42 では「～が」、例文 43 では「～ので」という接続表現が使用されている。さらに文末においても、中国語原文にはない接続表現が熟達者訳文において使用されている箇所が観察された。日本語の文末接続表現は、先行文脈との関連付けを行う・先行文脈の帰結や結果を示す・先行文脈の理由を示すといった機能を持つ（石黒、2008）ほか、文章中の語り口調に変化や多様性をもたらすという修辭的機能も持つ（メイナード、2019）。例文 44 の熟達者訳文では「のだ」、例文 45 では「わけだ」、例文 46 では「からだ」という接続表現が使用されている。

以上を総合すると接続表現に関連する両言語の差異は、日本語においては、中国語よりも文間や節間で接続表現が多用され、より明確な論理性が求められる傾向を持つことに起因するものであると考えられる（表 5 の 2、5、6 に関連）。

#### 4-1-3-3. 論理構造

本カテゴリー（例文 47-51）に関しては、中国語原文と熟達者訳文の間で文を構成する一

部の節の配置が変化するという現象が観察された。例文 47 の中国語原文では“①不让去学  
堂”（結果）→“②会得关节炎”（理由）の順番で配置されているが、熟達者訳文では「②関  
節炎になるから」→「①学校に行かせるのを渋る」の順番で配置されている。例文 48 では  
“突然小男孩撒腿就跑”（結果）→“②他要回家叫娘来帮把手”（目的）が「②おっかさんを  
呼んできて助けてもらおう」→「①男の子はパッと駆け出した」のように反転している。  
例文 49 では“①由一千多元一下子猛涨到三千”（結果）→“②像坐上直升飞机”（方式）が  
「②ヘリコプターのように」→「①千元台から三千元へと、あっという間に急騰している」  
のように反転している。これらは中国語原文の論理構造が「①結果→②理由・目的・方式」  
の順番であるのに対し、熟達者訳文では反対の「②理由・目的・方式→①結果」であるこ  
とを表す。

また、例文 50 の中国語原文では“①儿子真是争气”→“②被大学录取”の順番で配置され  
ているが、熟達者訳文では「②大学に合格するなんて」→「①我が子ながらあっぱれだ」  
の順番で配置されている。同様に、例文 51 では“①简直是出乎意外”→“②儿子说”が「②  
息子が言ったのは」→「①まったく意外であった」のように反転している。これらは中国  
語原文の論理構造が「①結果（意見）→②理由（事実）」の順番であるのに対し、熟達者訳  
文では反対の「②理由（事実）→①結果（意見）」であることを表す。

これらに関連して、今富（1973:57）では、「①→②として訳すことが可能であるが、こ  
れらの中国語文例の中心思想はあくまで①であるから、②はその目的・理由の説明で、②  
のために①をするという訳し方が適当である。①→②にすれば、真意からは大幅にずれる  
ことになる」と指摘されている。このような差異は、中国語では結論や中心思想が先に置  
かれ、理由・目的・方式などが後に置かれる傾向を有するのに対し、日本語ではその逆の  
傾向を有することに起因するものであると考えられる（表 5 の 7 に関連）。

#### 4-2. 各具現形式の翻訳における難易度と留意点

本稿の最後に、各言語的具現形式の翻訳を行うにあたっての難易度について考えてみたい。  
(4-1-1-g を除く) 本研究で設定した各具現形式のカテゴリーを、その中国語-日本語  
変換の規則性に合わせて「i. 規則的」「ii. 強い傾向性あり」「iii. 弱い傾向性あり」「iv.  
不規則」の 4 段階に分類する場合、表 6 のように分類することが可能であると考えられる。

言語変換操作という側面における翻訳の難易度に関して換言すれば、グループ (i) の翻  
訳はより易しく、グループ (iv) の翻訳はより難しいと言える。例えばグループ (i) の「時  
間や空間を表す語彙」「既知の情報を表す語彙」などは、中国語原文中に出現する特定の語  
彙を日本語訳文上では訳出しないといったような規則的な操作によって処理可能である。  
一方でグループ (iv) の「伝達態度のモダリティ」「丁寧さのモダリティ」などは、テクス  
ト全体を深く読み解き、発話主体である作中人物の性格や背景情報などを正確に理解した  
上で、そのコンテキストに最適と考えられる終助詞の付加や表現スタイルの変更などの処  
理をしなければならない。ここまで述べてきた表 6 における分類を、言語一般が有する 3 種  
のメタ機能に基づいて総括すると、観念構成的機能に対する翻訳プロセスはテキストの種

表6. 各言語的具現形式の翻訳の難易度

(i) 規則的	(4-1-1-1-b) 概数表現に関する語彙 (4-1-1-1-e) 時間や空間を表す語彙 (4-1-1-1-f) 既知の情報を表す語彙
(ii) 強い傾向性あり	(4-1-1-1-a) 慣用表現に関する語彙 (4-1-1-1-c) 誇張表現に関する語彙 (4-1-1-1-d) 評価や感情を表す語彙 (4-1-1-2-a) 名詞の繋ぎ方 (4-1-1-2-b) 修飾語の並べ方 (4-1-3-2) 接続表現 (4-1-3-3) 論理構造
(iii) 弱い傾向性あり	(4-1-1-3) 構文 (4-1-2-1-a) 情報系のモダリティ (4-1-2-1-b) 行為系のモダリティ (4-1-3-1) 指示表現
(iv) 不規則	(4-1-2-2-a) 伝達態度のモダリティ (4-1-2-2-b) 丁寧さのモダリティ

類によらず規則的な傾向を持ち、対人的機能に対する翻訳プロセスは個々のテキストに強く依存し、不規則であり、テキスト形成的機能に対する翻訳プロセスは前二者の中間的な規則性を有すると言えよう。すなわち各メタ機能の翻訳の難易度の傾向は、観念構成的機能 < テキスト形成的機能 < 対人的機能であると言える。

ここでさらに、物語テキストにおけるテキストの個性を決定する各主体と言語のメタ機能との関係から、上記で述べた翻訳の規則性・難易度の問題について考えてみたい。各物語テキストの個性を決定する主体を①書記言語を制約する「言語共同体」、②文体を制約する「作者」、③直接引用の口調を制約する「作中人物」の三者であると大雑把に定義した場合（図3）、言語のメタ機能のうち観念構成的機能は①の、テキスト形成的機能は①②の、対人的機能は①②③の規則による制約を受け、特定の言語形式に定まると考えられる。そのために観念構成的機能は非テキスト依存的であり、対人的機能はテキスト依存的であると考えられる。

このように考えてみると、学習者の物語テキストの翻訳に対する難易度に関しては、次のようにも言えるだろう。翻訳に際して、起点言語と目標言語の双方に対する深い知識が必要不可欠であるが、両者に対する知識が一定の段階を超えて以降に関して言えば、(1) 観念構成的機能・(2) 対人的機能・(3) テキスト形成的機能の各メタ機能について難しく感じる領域は、学習者の得意な領域に比例して変化することが予想される。例えば学習者を3タイプ(A・B・

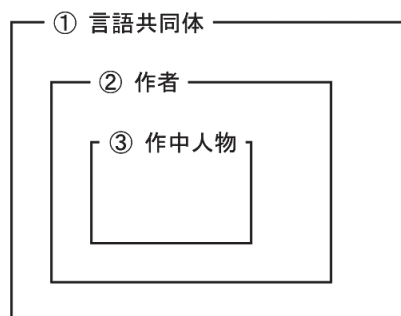


図3. 物語テキストの個性を決定する三主体の関係性の概念図

C) に分類した場合、以下のような傾向を示すことが想定されよう。

(A) 言語学的領域（外国語運用など）が得意な学習者は、(1) の難易度がより低く、(2) (3) の難易度がより高いと感じるかもしれないこと。

(B) 修辞学的領域（文章執筆など）が得意な学習者は、(3) の難易度がより低く、(1) (2) の難易度がより高いと感じるかもしれないこと。

(C) 文学的領域（作品鑑賞など）が得意な学習者は、(2) の難易度がより低く、(1) (3) の難易度がより高いと感じるかもしれないこと。

このようなことから、例えば大学の中国語中上級クラスなどで中日翻訳を授業課題として導入する場合には、初級レベルの中国語文法を確実に定着させることを必要条件としつつ、上記のような学習者の特性に合わせて予習課題の内容や配分を変えるとといった工夫がより効果的であろう。

## 5. おわりに

本稿では、選択体系機能理論を基盤とし、観念構成的機能・対人的機能・テキスト形成的機能の3つのメタ機能とその言語的具現形式を視点として、中国語の短編小説の原文と学習者訳および熟達者訳との比較分析を行った。その結果として、ほぼ原文の構成に準じて直訳した学習者訳とは対照的に、熟達者訳では単語と単語の置換に留まらず、表5に整理したような中日両言語の差異を加味した上で、考察4-1にて議論したような一定の規則性を持つ変換操作を行うことによって翻訳の等価性が確保されていることが確認された。この中日両言語の差異に関して換言すると、中国語には「誇張表現」「感情表出」「動詞句優位」「直接表現」「論理関係の不明示」「結論先行」などの特徴があるのに対し、日本語には「実写表現」「感情抑制」「名詞句優位」「間接表現」「論理関係の明示」「結論後置」などの特徴があることが示唆された。本研究においては、このような中日両言語の表現傾向やズレを理解し、その背後にある思考様式の違いにも配慮しながら翻訳を行うことの重要性を改めて確認することができた。

今回の分析資料は限られた事例数ではあるが、10編の短編小説の中日翻訳を体系的に整理し、学習者訳において翻訳が困難だった部分とその要因について示すことができた。本研究が中日翻訳の実践にあたり、少しでも参考になれば幸いである。今後は翻訳実践の資料をさらに増やし分析を重ねたり、今回示した傾向の中でも学習者にとって特に難易度の高い部分に絞って考察したりしていきたい。また、翻訳に正解はなく、「直訳中心」から「意識中心」へ、さらに「自然訳」へと翻訳手法を段階的に高めていくことも重要であるが、翻訳プロセスの多様性にも着目していくことが、今後の翻訳実践を考える上で欠かせない視点の1つであろう。

## 参考文献

高橋弥守彦 (2020) 《中日翻译学的基础与构思》外语教学与研究出版社

Halliday, M. A. K., & Hasan, R. (1989) Language, context and text: Aspects of language

- in a social-semiotic perspective (2nd ed.). Oxford: Oxford University Press.
- 橋本陽介 (2020a) 『中国語における「流水文」の研究』 東方書店
- 橋本陽介 (2020b) 『「文」とは何か 一愉しい日本語文法のはなし』 光文社新書
- 今富正巳 (1973) 『中国語⇔日本語翻訳の要領』 光生館
- 石黒圭 (2008) 『文章は接続詞で決まる』 光文社
- 賈華 (2011) 「構文法における中日間の相違についての一考察」『日中学術研究誌』 4, pp.71-80.
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』 研究社
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店
- 金水敏 (2014) 『〈役割語〉小辞典』 研究社
- 小林一郎 (2017) 「意味へのアプローチ:ハリデー言語学の観点から」『認知科学』 24 (1) pp.8-15.
- 近藤安月子 (2018) 『「日本語らしさ」の文法』 研究社
- 泉子・K・メイナード (2019) 『日本語本質論 翻訳テキスト分析が映し出す姿』 明治書院
- 榎山洋介 (2010) 『認知言語学入門』 研究社
- Nida, E.A., Taber, C.R., Brannen, N.S. (1969) *The Theory and Practice of Translation*, Netherlands: Leiden.
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4:第8部モダリティ』 くろしお出版
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論 —指示的名詞句と非指示的名詞句』 ひつじ書房
- 劉月華ほか (著); 相原茂 (監訳) (1996) 『現代中国語文法総覧 (合訂本)』 くろしお出版
- メアリー・シュレツバグレル (著); 石川彰ほか (訳) (2017) 『学校教育の言語—機能言語学の視点』 ひつじ書房
- 単艾婷 (2021a) 「レベル横断型中国語読解テキストの設計と試行—現代小説を題材として—」『西南学院大学言語教育センター紀要』 第11号 pp.33-48.
- 単艾婷 (2021b) 「文学テキストの空所を読む—中国語上級クラスにおける小説読解実践からの一考察—」『西南学院大学言語教育センター紀要』 第11号 pp.49-70.
- 単艾婷 (2024) 「四技能の有機的連携を目指したオーセンティック中国語学習—テキスト『中国 ことばの世界を旅する』を用いた事例研究—」『東アジア言語文化研究』 第6号 pp.1-11.
- 陳美玲 (2001) 「「ト」の用法と中国語との対照」『言語文化と日本語教育』 22, pp.1-12.

#### 謝辞:

翻訳講座講師の高橋弥守彦先生には、常に丁寧な訳文の添削と、中文和訳の有益なテクニックのご指導を賜りました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。また、本研究はJSPS 科研費 22K13171 (課題名:読書活動とコミュニケーション活動の統合による新たな中国語教授法の構築) の助成を受けて行った研究成果の一部です。